

「住民主体の武庫川づくり」3つの現場から ～コロナ禍におけるとりくみ

亀井敏子・木村公之・古武家善成・佐々木礼子・土谷厚子・辰登志男・法西浩・
山本義和・吉田博昭(武庫川づくりと流域連携を進める会)

はじめに

当会は、武庫川水系河川整備基本方針に位置付けられた住民の参画と協働の川づくりにおける多様な生きものが育む河川環境づくりの実践を目的に、①水辺の小さな武庫川づくり②アユの遡上復活を目指した実態調査、③河川環境・景観ストック調査の3つの視点から調査および活動を実施してきた。一方、コロナ禍を背景に多くの住民が水辺の環境に親しみを覚えるようになり、我々の地道な活動とのふれ合いによって長期的な視点で将来の担い手が育っていくような予感を感じることができた。

1. 水辺の小さな武庫川づくりにむけた小さな川づくり実践

水辺の小さな武庫川づくり実践グループ

亀井敏子・佐々木礼子・法西浩・山本義和・吉田博昭

活動概要

昨年度から開始したコロナ禍での「水辺の小さな川づくり」は、例年どおりに「アユをはじめとする多様な生きものが育む都市の貴重な自然空間」である仁川合流付近のモデルゾーンで実施した。大雨による出水の度に仁川から生産される土砂の堆積があるが、河川整備による河床掘削や河道拡幅および河道付替えなどによって昨年度とは全く違う様相になった。自然の力と人力によって改変され続ける河川環境において、昨年度と同様に粛々と「①水路づくり、②ゴミ漂着抑止、③環境モニタリング、④川の駅づくり、⑤川の魅力発信」の5つの実践に取り組んだ。

成果とまとめ

我々が実践している自然が相手の川づくりは、加速する温暖化の影響によりこれまで以上の様相の変化が起きることを想定し、不安と期待を寄せながら今年度も取り組んだ。

生きものを優しく育み私たちが癒してくれるせせらぎは、一雨の大雨出水で濁流と化し、刃を剥き、一夜にしてせせらぎは土砂に埋め尽くされる。しかし、どのように環境が改変されても絶間なく流れ続ける水の流れは、たった一筋の小さな流れから再び新たな河道を形成していく。我々はそこに、ほんの少し人力で手を加え続けることによって流れ方をコントロールしながら形成する新たな河川環境づくりを施し続けた。一方、浚渫撤去された中州は半年を待たずして砂州が成長し始めた。

如何に浚渫をしてもまた次の洪水によって流れの様相は改変され、再び浚渫などの土砂撤去を施す。これの繰り返しである。このような河川では、一度に大勢を集めて一つのイベントとして短期に取り組む「水辺の小さな川づくり」には向いていない。そこで、今年度の具体的な取り組みも昨年と同様に武庫川守の数名がスコップや鍬、ノコギリなどの身近な道具を持ち寄り、新たに形成された仁川合流付近において、絶間なく流れ続ける水の流れなどの自然力を利用して流れを絶やさないようにする作業を続けた。すると、地道に作業を続けているうちに、川が「ここを掘ってくれ！この木を切ってくれ！」と



写真1. 鯉の産卵観察



写真2. 久しく見かけなかったコイの幼魚

呼びかけてくるかのように次の手立てが見えてくる。少し手を加えるだけで、何かが変わることも実感できた。さらに作業を続けていると、次から次へと人が現われ、さまざまな問い合わせや武庫川への思いが語られ、次世代の武庫川守育成の可能性に確かな手応えを感じた。根気よく手入れを続けた結果、生きものが戻り、川への関心も高まることが判明した。

また、このゾーンは河川行政も着目する多様な生きものが育む下流築堤区間における貴重なゾーンであり、住民の参画と協働の川づくり実践舞台として「みんなで取り組む武庫川づくり」を例年企画し、市民と行政が自然空間で触れ合える場を創出している場でもある。

2. シンボルフィッシュアユの遡上復活を目指した実態調査

天然アユの遡上復活研究グループ

木村公之・古武家善成

活動概要

昨年度は宝塚新橋下流においてアユが目視確認され、試し釣りでも宝塚新橋付近まで遡上していることが確認できた。そこで今年度は水中カメラを購入し、生息状況の観察にチャレンジしたが、遡上不良か技術的な問題なのか不明であるが、魚影に出会うことがなく、撮影には失敗した。



写真3 試験釣りで採れたアユ



写真4 アユのアクアパッツァ

一方、流域市民に手っ取り早く武庫川のアユの存在を知ってもらうには「まずは生きたアユを見てもらうこと」だろうと考え、捕獲を試みようとしたが、内水面漁業法など法的規制の壁が立ちはだかり、やむなく今年は捕獲をあきらめた。そこで、生きた武庫川のアユを流域市民に見て頂くことも大事な一歩であるが、「食べる」ことも理解を助長するものと考え、インターネット情報を元に「アユの食文化」についてまとめ、色んな国で様々な食べ方があることを知った。

成果とまとめ

今年の調査から、内水面漁業法など法令を順守した捕獲には武庫川漁業協同組合の協力が不可欠であることが分かった。次年度は、武庫川漁業協同組合のご協力を得る見通しが立ち、稚鮎入手・試し釣りなど、関係者のご理解やご指導を得て、生きたアユを「人と自然の博物館」で展示することを目指したい。

3. 河川環境・景観ストック調査

河川環境・景観ストック調査グループ
土谷厚子・辰登志男

活動概要

武庫川峡谷の下流端「生瀬橋」は、鎌倉時代の僧、証空が山賊に仏道を教え、武庫川に橋をかけて「浄橋」と名付け、その通行料で生活を正したと伝えられる。後に、秀吉公が小浜宿の毫攝寺で泊まり、生瀬橋を渡って有馬温泉に通ったことでも知られている。近年では、今はマンションになっているが、明治33年から平成6年まで、生瀬橋のそばにはウィルキンソン生瀬工場があったことでも知られ、歴史的価値の大きいところである。

そのような生瀬橋は、下流市街地に展開する扇状地の入り口であるとともに武庫川峡谷の入り口で峡谷を代表する地質学的景観的要所として、正常流量を設定する代表地点、水辺の環境・景観保全上の重要な基準点に指定されている。しかし、平成16年の台風による洪水で生瀬橋上流右岸が崩壊し、当時の復旧工事は完了しているが、令和2年に武庫川河川改修工事・旧国道176号線改修工事の共同事業による本格復旧工事が実施され、工事に伴う景観の変化が著しいことから追跡調査を実施した。

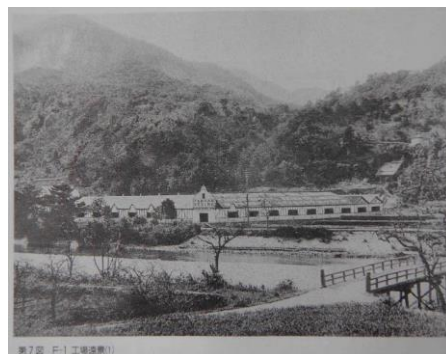


写真5 明治33年の生瀬橋とウィルキンソン

成果とまとめ

新しい護岸の下方は環境に配慮したポーラスコンクリート方式を採用している。この素材は、水中で苔が付き水生生物の棲み処になるかもしれない工法ではあるが、市民目線では草木が生えず、陰などの創出がなく、夏場や洪水時に水生生物の避難場所がないゾーンになり、生きものに優しい護岸とは思えない。また、部分的な工事でやむを得ないのかもしれないが、工事区域だけが異様に目立ち不調和な景観を呈している。

今後の河川改修では、実施計画検討の段階から行政と市民の意見交換の場を提供してもらい、流域市民の経験・知識が活かせる「いい川づくり」ができるようにしたい。そのためにも景観ストックを調査し、データとして整理することの必要性を一層強く感じた。



写真6 護岸改修後の生瀬橋上流側景観

4. コロナ禍における活動を通して

住民主体の武庫川づくり活動は、自然が主な対象であり、一人ひとり、その場その時の環境を見合わせての活動となる。コロナ禍での活動については、人との接触は、広い自然空間で距離を空けて実践できるような環境下で特段の支障はなかった。一方、コロナ禍ゆえに分かったことは、我々の子ども時代と同じように、一人ひとりの創意と工夫を凝らして思い思いに川づくりや水辺を楽しめるようになったことである。かつての古き良き健全な川との付き合いが戻ってきたようにも思え、新型コロナはそう悪いことばかりではなかった。